

氏 名	か とう ふとし 加 藤 太
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 64 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	氾濫原における土地利用の多元性と在来稲作の展開 ——タンザニア、キロンベロ谷の事例——

論文調査委員 (主 査) 准教授 伊 谷 樹 一 教 授 太 田 至 准教授 池 野 旬

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、タンザニア有数の稲作産地であるキロンベロ谷を対象として、同地域における稲作を農業生態学的に分析するとともに、湿地の多元的な利用と競合について考察している。序章では、タンザニアにおける稲作の歴史と現状を詳説して、キロンベロ谷における稲作を同国の農業のなかに位置づけると同時に、近年における政策や経済の動向を俯瞰し、同地域が抱える農業の問題点を指摘しながら、本研究の目的と調査方法を示している。

第1章では、キロンベロ谷および調査村の生態環境、民族、歴史、生業形態、生活様式、経済状況などを概観している。キロンベロ谷は、キロンベロ川本流沿いに広がる氾濫原を中心に、支流が形成した扇状地や季節湿地といった多様な生態環境からなり、そこではポゴロを中心とする諸民族によって、19世紀にはすでに稲作がおこなわれていた。

第2章では、キロンベロ谷に展開する在来稲作を生態環境と農法から分類し、それぞれの類型について栽培上の特性を示している。いずれの類型においても水分の供給を天水あるいは洪水に依存した水稻栽培がおこなわれている。第3章では、ポゴロの稲作に焦点をあて、各類型について農業生態学的な分析を加えている。彼らは主に支流の洪水に依存した稲作をおこなうため、稲作地帯は支流に沿って分布し、洪水期にあわせて品種選択や播種期が決められるなど、支流の洪水が作付け体系を規定する主要な要素であることを明らかにしている。

第4章では、農業政策の変遷をたどりながら、キロンベロ谷にコメ産地が形成されるプロセスを示すとともに、ポゴロの経営戦略についてまとめている。1970年代、タンザニアでは農業の近代化がはかられ、キロンベロ谷にもトラクタが導入された。また1980年代後半に穀物流通が自由化されると、自給用に栽培されていたコメが商品化され、現金収入と食料自給を両立する目的で稲作地が拡大されていった。耕地は支流に沿って分布するため、稲作地は遠隔地化し、季節的な移住耕作が余儀なくされていった。彼らは、稲作に特化するとともに、トラクタ、トラック、除草剤を積極的に使用して農作業の軽減をはかり、稲作はますます現金経済との結びつきを強めていった。

一方、1980年代に放牧地を求めてキロンベロ谷に移住してきた半農半牧民スクマは、支流の氾濫が及ばない場所を開墾し、牛耕によって大規模な水田を造成していった。第5章では、家畜に高い社会的価値をおくスクマの生業構造と生活様式、慣習について解説している。彼らは畦畔に囲まれた水田によって、洪水に頼らない稲作をおこなうため、ポゴロとは耕地が競合せず、キロンベロ谷には新たな稲作体系が拡大していった。

終章では、近年における政策や経済の動向を捉えながら、氾濫原の多元的な土地利用と、湿地をめぐる土地競合の問題に言及している。ポゴロの稲作地が氾濫原の中央部にまで拡大したことで、スクマの放牧地との間で土地をめぐる争いが顕在化していった。さらにタンザニア政府は2006年に、野生動物保護と観光産業の振興を目的として、キロンベロ氾濫原の中央部に野生動物保護区を設置してそこでの生業を禁止し、これによりポゴロとスクマはともに耕作地や放牧地の拡大ができなくなった。農耕地と放牧地と野生動物の生息地をめぐる土地の競合は、現代アフリカが抱える重大な課題であり、民族集団間の抗争や政府と住民との対立の火種になるケースも少なくない。しかし、この事例では、競合していた民族集団が共通の

問題を抱えることで協調的な関係が構築されはじめている。生業形態や価値観の異なる民族集団の接触は、必ずしも対立関係を生み出すわけではなく、むしろ共通の難局を克服する局面においては相補的な関係が築かれ、それが技術や知識の伝播の契機となると結論している。

論文審査の結果の要旨

タンザニアでは1980年代後半以降、穀物流通が自由化されたことで、商品作物がさかんに栽培されるようになり、とくに稲作は急速に栽培面積を増やしていった。その背景として、湿原に広大な未開墾地が残されていたことを指摘できるが、そうした湿原は牧畜民が放牧地として利用し、また野生生物の棲息地として環境保全の対象とされてきた場所でもある。湿地開発がすすむにつれ、そうしたさまざまな思惑が重なり合い、利用者間での土地をめぐる争いが表面化してきている。

タンザニア東南部を北流するキロンベロ川の河畔には広大な内陸氾濫原が広がり、そこでも稲作地が急速に拡大して、現在では国内有数のコメ産地となっている。本論文では、キロンベロ谷における稲作の実態を捉えるとともに、同地域にコメ産地が形成されたプロセスを政治・経済の動向に照らしながら明らかにし、さらに湿地利用に関する土地問題を、生活様式が異なる二つの民族集団の視点から分析している。

本論文は、以下の三つの学術的な貢献によって高く評価できる。第一は、キロンベロ谷における稲作システムが、複雑な地形的変異を利用した複数の在来農法によって構成されていることを明らかにするとともに、それぞれのメカニズムを農業生態学的に分析し、氾濫原稲作の全容を捉えたことである。キロンベロ谷には多数の支流が流れ込んでいて、それらがつくる扇状地がおもな稲作地となっている。申請者は、この支流が雨期の終盤に短期的な氾濫を繰り返し、それがイネの作付け体系や品種の選定に強く関わっていることを作物学的な解析によって明らかにしている。

第二の貢献は、当該地域におけるコメの産地化の形成プロセスを学際的な分析によって明らかにしたことである。1970年代、タンザニアでは農業の近代化がはかられ、キロンベロ谷にもトラクタや農薬が導入された。1980年代後半、穀物流通の自由化にともなってコメの商品価値が高まると、同地域で稲作を営んできたボゴロは、食料自給と現金収入の確保に向けて、支流の氾濫に強く依存しながら、農地を支流の下流側に拡大していった。それは農地の遠隔地化を意味し、コメ運搬用トラックの利用、季節的な移住耕作、それにとまう稲作への専門化といった事態を招来し、彼らの生活はますます現金経済との結びつきを強めていった。一方、1980年代、放牧地を求めてこの地に移住してきた半農半牧民スクマは、畦畔造成や移植、牛耕の技術を使いながら、支流の氾濫が及ばない場所に大規模な水田を造成していった。こうして二つの稲作体系を軸としながら、氾濫原が多角的に利用されるようになっていった。

第三の学術的な意義は、政策や経済の動態を捉えながら、湿原における土地の利用と競合の実態をそれぞれの利用者の立場から明らかにしたことにある。スクマは、ボゴロが利用しない場所に水田を開き、支流の下流域に広がる湿原でウシを放牧していたが、ボゴロの稲作地が支流の下流域に拡大するにつれて、スクマとの間で土地をめぐる衝突が頻発するようになっていった。一方タンザニア政府は観光産業の振興を目的として、キロンベロ氾濫原の中央部に野生動物保護区を設置し、そこでの生業を禁止した。農耕地、放牧地、野生動物の生息地をめぐる土地の競合は、現代アフリカが抱える重大な課題であり、民族集団間や、政府と住民との対立の火種になるケースも少なくない。しかし本論文では、生業形態や価値観の異なる民族集団の接触は、必ずしも対立を生み出すわけではなく、共通の難局においてはむしろ相補的な関係も築かれることを示し、アフリカにおける農耕民と牧畜民の対立問題に関する重要な視座を提供している。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものとして認める。また、平成20年1月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。